

神大法曹会の人々

さかい法律事務所訪問記

弁護士 左海徳郎

(神大ロー2期末修コース出身 新65期 神奈川県弁護士会)

聞き手 坂本真史 (神大ロー2期末修コース
新64期 神奈川県弁護士会)

坂本 今日は、神大ロー2期末修コース出身の左海徳郎^{さかいとくろう}弁護士が開設した「さかい法律事務所」を訪問しています。それではよろしくお願いいたします。

左海 よろしくお願いたします。

坂本 まずは簡単に経歴をお聞かせください。

左海 幼稚園から小学校3年生まで横浜市西区の学校に通い、その後川崎に転居し、川崎市川崎区に所在する小学校、中原区に所在する中学校、高校を卒業しました。

坂本 川崎が地元なのですね。大学の学部はどちらですか？

左海 法学部政治学科です。

坂本 大学生の時から法曹を志していたのでしょうか？

左海 いいえ、全く考えたことはありませんでした。大学に入学したころは、本気で政治家になろうと思っていたので(笑)。

坂本 えっ？ その話は初めて聞きますね。詳しく聞かせてください。

左海 私が大学に入学したのは、1994年ですが、その前年の1993年に細川連立政権が誕生しました。当時は、自民党・社会党の55年体制が終結し、新しい日本の幕開けという空気感がありました。その頃が進路を決める時期だったので、とても大きな影響を受けました。ま



るで明治維新のような歴史の転換点にいる気分になって、細川護熙『日本新党責任ある変革』や小沢一郎『日本改造計画』、武村正義『小さくともキラリと光る国・日本』など政治家が出版した政治理念や政策の本を夢中で読んでいました。それで「自分もこういった時代に政治家になって日本のために仕事をしたい」という漠然とした思いで、政治学科への進学を決めました。18歳ですから若かったですね(笑)。

坂本 なるほど。そうすると、大学入学後は国内政治の勉強を？

左海 大学に入学して色々な政治学の授業を取って勉強しましたが、一番面白かったのは「国際政治学」でした。日本にとっての外交・

防衛という側面からは国内政治でもありますね。日本で55年体制が終結し、転換点を迎えたのと同様に、世界でも大きなパラダイムシフトが起こっていました。具体的には、1989年にベルリンの壁が崩壊し、1991年に超大国であったソビエト連邦が崩壊していました。普遍的だと思っていた世界地図が毎年変わっていく、国際的にも激動の時代でした。私が大学に入学したころには、冷戦が終結した影響からユーゴスラビアやソマリアなど各地で民族紛争が頻発していました。こうした世界情勢の中で、武力紛争をなくすためにはどうしたらよいのかというのが次第に私の関心事になっていきました。紛争を終結させ平和を維持するためにはどうしたらよいのか、再び紛争を起こさないためにはどうしたらよいのかということを予防外交やヒューマンセキュリティなどという安全保障の観点から勉強していました。これらは日本の外交・防衛にとっても重要なキーワードでした。

坂本 国連職員などになろうとは思わなかったのですか？

左海 考えたことはありました。でも、国連のような枠組みそのものに疑問を感じていたんです。私の立ち位置は、漠然として実体のない地球市民のような幻想ではなく、現実的な国家でしたから。やはり、全ての国境がなくなることはないし、国家レベルの安全保障政策が現実的な平和にとっては重要だと考えていたのです。

坂本 なるほど。

左海 私は、当時の武力紛争を予防するためには、貧困から脱却することが一つの解決策だと考えていました。貧困といっても経済的なもの、社会的なもの、政治的なもの、文化的なものと同様あるのですが、PBO（Peace Building Operations）という平和構築活動によって平和な社会の基盤を整備して、対立が武力紛争にエスカレートしていかない社会をつくるのが大事だと考えていました。特に社会の根幹である教育、法整備、インフラ整備は重要です。そして、この分野では日本がメインプレイヤーとし

て貢献する余地がたくさんありました。法整備支援などは、法体系が同じになると経済取引上も有利ですし、同じ法文化を持つ国として外交上も友好関係を築け、日本としても非常に多くのメリットがあります。

坂本 なるほど、話についていくのが大変です。

左海 大学を卒業するころにはそうした研究をしてみたいと思うようになっていました。大学院では政治学をベースとして、安全保障政策の観点から国際開発協力を平和構築の一つの手段として戦略的に使えないかということをテーマに研究しようと思っていました。でも、当時、学問的には国際開発協力＝開発経済学でした。一度、国際開発協力の世界で高名な教授に相談したのですが、「この世界は経済学をやっていないとダメだよ。政治学じゃ飯を食べていけないよ」と笑って言われてしまいました。ただ、そう言われてむしろやる気が起きてしまいましたけど（笑）。

坂本 国際開発協力は「経済学」が扱う領域なのですか？

左海 ええ。当時は開発経済学がメインでした。当時はまだ開発は経済発展的な側面ばかりが強調されることが多くて、社会発展的な側面は重視されていませんでしたから。実際の発展とか開発というのは政治学や社会学、文化人類学、宗教学、もちろん経済学なども含めての学際的な事象であるはずなのですが、研究レベルになると縦割りで、当時私が知る限りではそれらを統合する視点が欠けていたのです。

坂本 大学を卒業した後は？

左海 大学院の政治学専攻に進学しました。師事できる指導教授がなかなか見つからなくて困っていた時に、たまたま政治学をベースとする当時としてはレアな国際協力の実務家教員の方が大学に招聘されてきたので、やりたかった研究をすることができました。運が良かったのです。

坂本 博士課程に進もうとは思わなかったの

ですか？

左海 留学を勧められましたが、あまり留学はしたくなかったのです。

坂本 なぜですか？

左海 欧米の国々における学問水準が日本よりも進んでいるかという、必ずしもそうではないという気がしていましたし、様々な情報はネットでも十分に収集できる時代になっていましたから、留学に積極的な意味を見出せませんでした。逆説的かもしれませんが、国際政治や国際協力という「国際」の場においては、海外の知見を無条件に賛美してありがたがるよりも、日本的なものの見方や歴史経験を追求していくほうがむしろアドバンテージを得られる気がしていました。日本は一神教の国ではありませんし、サミュエル・ハンチントンによれば一つの文明圏でもありますから、そういう特殊性に自ら気づき、日本発の発想を生かしていくことこそが大切だと考えていました。

坂本 結局、留学しないで、2005年に神大ローに入学されました。どうして法科大学院に進学しようと思ったのですか？

左海 留学について積極的になれなくて、今後の進路をどうしようか悩んでいた時期がありました。そんな時に、何と言ったらよいのか、うまい言葉が見つからないのですが、気が変わったとでもいいですか……。

坂本 気が変わった？

左海 ええ。留学に積極的になれなかったことが引き金となって、研究を続けていくかどうかという根本的なところまで考えるようになっていました。安全保障の研究は大変面白いのですが、机上の空論的なところもあって、現実の生活と多分にかい離しているんですよね。「現実の生活空間の中で自分の力でいったい何ができるんだろう」って、今思うと色々人生を模索していた時期かもしれません。

坂本 なるほど。それで？

左海 ゼロベースで考えてみました。もともと、政治家になりたかったことを思い出して、

テレビでよく見かける有名な国会議員に「秘書にしてみらうにはどうしたらいいでしょうか」というメールを送ってみました。そうしたら「議員会館に会いに来なさい」というので会いに行ってみたりもしました。また、あるテレビ番組のオーディションに行ったりもしましたね。こっちは模索ではなく迷走かもしれませんが(笑)。

坂本 それから？

左海 結局、手の届く範囲の現実世界のなかで誰かのために何かできることはないかと考えたこと、国会議員の政策秘書にもなれる可能性があること、国際協力という観点からは法整備支援のプレーヤーになれる可能性があるということなどから、法曹の資格を取ろうという考えに至りました。そして、司法試験について情報を集めている時期に、新たな司法試験制度になったことを知り、法科大学院に進学することになりました。私は法科大学院に入学するまで全く法律を勉強したことがなかったので、しっかりと勉強したいと思い、小規模な大学院を探していました。そうしたときに、家からも近く小規模でもある神大ローと出会ったのです。

坂本 神大ロー入学後は国際政治のほうは？

左海 法科大学院には司法試験に合格するために入学したので、法律の勉強だけに専念したいと考えていました。それに入学してみると未修者コースなのに未修者ではない人たち(法学部出身者や旧司法試験の受験経験者)ばかりだったので焦りました。まずはその人たちに追いつかなければと思いました。

坂本 ロースクールの研究室で勉強している姿はあまり見かけませんでした。もっぱら自宅で勉強していたのですか？

左海 はい。確か、研究室には在学中の3年間で数回しか行っていないと思います。でも、研究室で勉強しなかったことには自分なりの理由がありました。まず、静かな自分だけの空間で集中して勉強したかったのです。だらだらと10時間勉強するよりも、集中して5時間で済

ませたいと思っていました。やっぱり、受験勉強をしていても、音楽を聞きたい、テレビも見たい、本や漫画も読みたい、友達と食事にも行きたいですからね。法科大学院だけで3年間もあるわけですし、勉強以外のことにも時間を使わないと早晚行き詰ると思っていました。受験勉強を持続可能とさせる生活の質は確保しておかなければと思っていたのです。また、研究室にいと、人の出入りもありますし、集中している時に声をかけられることもあります。いったん集中が途切れてしまうと、再度深い集中状態に戻すには一定の時間がかかるので、効率が悪いと感じていたのです。それに、クラスメートと一緒に過ごす時間はすごく楽しいじゃないですか。勉強するよりみんなで話をしていることの方が楽しいし、どうしてもそういう楽しい場所に自分が流されてしまうので、断腸の思いで楽しそうな空間からは距離を置いていたのです（笑）。

坂本 なるほど、そういう理由があったのですね。ところで、卒業は2008年3月で、司法試験に合格したのは2011年9月ですね。卒業後、司法試験の勉強はどのようにしていたのですか？ ずっと自宅で？

左海 ええ。当時はロー卒業5年以内に3回までという受験制限がありましたので、卒業後2年間は受験せずに自宅で勉強していました。私は予習より復習が大切だと思っているのですが、法科大学院在学中は授業の準備に追われてしまってほとんど復習ができていませんでした。また、答案を書くことも全然できていませんでした。ですから、卒業して2年間は復習と答案練習を中心に勉強すると決めていたんです。ただ、実際に書くと疲れるし時間がもったいないので、基本的には頭の中で答案を作成するようにしていました。頭の中でなら移動中でもお風呂でも寝る直前でもどこでも時間をかけずに答案が書けますし、手も疲れません。あとは、他の受験生がいる状況で実際に答案を書く機会は持たなければならぬと思い、予備校を利用し

ていました。

坂本 さかい法律事務所の開業は2014年4月でしたね。修習が2012年12月に終わってから、開業までの間は何をしていたのですか？

左海 毎日を楽しんでいましたよ。もともと、修習に行くのは1年先にしようと思っていました。でも、修習地が「東京」になりましたので、とりあえず頑張って修習に行きました。修習が終わってから、自分が何をやりたいかもう一度じっくりと考える時間が欲しかったのです。法曹の資格を取ろうと思った時に考えていた選択肢はいくつかありましたから。

坂本 なるほど。そうすると、何がきっかけで、開業の時期が決まったのですか？

左海 ずっと楽しんでた訳ではありません。修習が終わった半年後の2013年夏頃からは色々現実的に動き始めました。その際に選択肢の一つとして新たに開設される法律事務所を引き受けるかどうかで悩んだりもしていたのです。

坂本 悩んでいましたよね。

左海 結局、その話は意見の折り合いがつかず、2013年末の最終局面でお断りしました。そうした流れの中で、それだったら自分で開設しようということで、年が明けて2014年1月に事務所を開くことを決めました。2月になって物件が見つかったので即決して、それから必死に開業準備です。間取りから内装まで私と事務局の佐藤文彦君の2人でやりました。ホームセンターを1日に何往復もしたり、ブラインドを窓枠に固定したり、まだエアコンもついていない2月の寒い中での作業は大変でしたが、今となっては楽しかった大切な思い出です。

坂本 政策秘書ではなく、弁護士になろうと思ったのはなぜですか？

左海 法曹を目指した3つの選択肢で迷っていたのは事実ですが、手の届く範囲の現実世界のなかで誰かのために何かできることはないか、という思いがそのときに一番強かったのだと思います。また、自分が主体性を持って、自分の

思い通りに、やりたいことができる仕事は何かと考えて、弁護士登録を決めたのです。

坂本 その考え方からすると、どこかの法律事務所に「イソ弁」として就職するという選択肢もなかった？

左海 もちろん考えました。でも、自分のやりたいことを自分のやりたいように実現するためには、最初から自分の事務所を持つほうが、困難は伴いますが、近道であると最終的に思ったのです。

坂本 「やりたいこと」とは？

左海 修習のときに、弁護士になるのであれば「家事事件」に取り組んでみたいと思っていました。

坂本 「家事」というと、離婚ですか？ それとも相続？

左海 相続です。家庭裁判所で修習した際などに、相続人間の「骨肉の争い」をいくつも目の当たりにして、衝撃を受けました。何でもここまで至ってしまうのかと思いました。私は、親族関係はその先祖も含めて、何ものにも代え難い大切に尊いものだと思っています。それなのに、例えば、親の遺骨を分骨して、兄弟姉妹はもう一生顔を合わせないようにしたいという状態にまで至ってしまっているのが、すごくもったいないというか、やるせないというか、どうしてそこまで至ってしまったのか、こういう結末を回避する方法は何かなかったのかと、強く思いました。こうした最悪の事態に至る前にそれを回避するために何かできないかと、そこまですってしまう前に、何か手当ができるのではないかと考えていました。そして、死後に争いが起こらないように生前からきちんと準備をしておくことは被相続人の最期の大きな責任であると思い、こういった準備をサポートすることはできないかと考えました。この考え方は先程の武力紛争予防の話とも通底しているのです。

坂本 と言いますと？

左海 先程の武力紛争予防というのは、紛争や戦争という結論に至らないようにどうするの

かという話です。それが、外交であったり平和構築活動であったりするわけです。戦争や紛争というのは独立して存在しているのではなく、外交・交渉の延長線上にあるわけです。紛争・戦争という結論を回避するために色々な努力をするけど、不幸にして紛争・戦争という、時に経済的合理性がない最終手段を取らざるを得なくなることもあるのです。このプロセスは規模や性質に違いはあれ、様々な紛争一般においても共通することだと思います。民事紛争においても多くの資金や労力を消費する裁判に至らないために予防や交渉をするわけです。相続について言えば、生前に思いを伝えておくことに始まり、死後の紛争を回避するために遺言や遺言執行者、資産の組換えや納税資金の準備、信託や生前贈与、事業の承継などとることができる紛争予防策はたくさんあり、それらを効果的に組み合わせることで将来の紛争を予防できます。このような紛争予防プロセスの中で、自分がどのようにかわっていくかをずっと考えています。相続問題を単なるゼロサムゲームにはしたくないと思っているのです。

坂本 弁護士のビジネス、つまり事務所の経営を考えると、紛争を予防するよりも、むしろ紛争になっている方が現実的な売り上げにつながりやすいところがありますよね。

左海 でも、それだけだと武器商人みたいですよ（笑）。もちろん、既に紛争が起きている場合も多く、その場合には適切に対処します。でも、紛争予防が経営として成り立たないからやらないのか、やっていないから経営として成り立っていないように見えているのかはわかりません。色々な方のご意見を参考にして、改めるべきところは改めながら前進していくことで、道は拓けていくものだと思っています。

坂本 事務所を開いて3年目ですが、やりかった「家族の紛争予防」に取り組むことはできていますか？

左海 徐々にです。小さな一步一步ですが。ただ、世間一般では法律事務所の敷居がまだま

だ高く感じられていると思います。実際に「大けが」や「大病」になってから相談に来られる方があまりに多く、予防の段階で法律事務所に相談に行くという発想をお持ちの方はまだまだ少数です。予防の段階で弁護士に相談してもよい、むしろそうするべきだということを、どうやって知っていただくかが課題だと思います。私としては健康診断のような感覚で来所していただきたいと思っています。

坂本 「敷居の高さ」を打破する方法はありますか？

左海 一朝一夕にはいかないですね。仮に広告を出したところで、一過性のものでしかないという気がしますし。

坂本 他に力を入れて取り組まれていることは？

左海 私は、相続に力を入れているのと同時に、法律相談をとっても重要視しています。法律相談は、時間をかけてなるべく詳しくやりたいのです。事務所以外で市民法律相談などを担当するときは、相談内容が事前に分からないにもかかわらず相談時間は20分や30分と限られてしまうのが現状です。事務所での法律相談は、まず事前に時間をかけて相談内容の聞き取りをしっかりとします。そして、聞き取りに基づいて個別に時間をかけて検討を行ったうえで、法律相談を実施することにしていきます。相談者が安心を得てお帰りになれるように心がけています。

坂本 なぜ法律相談にこだわるのですか？

左海 法律相談は相談に来られた方との関係の「入口」だと考えています。相談者に信頼していただくことができれば、何か別の問題があったときにもお越しいただけますから。さらに、その方たちの口コミで事務所の存在が浸透していけば理想的だなと思います。

坂本 事務所の経営を考えると、法律相談から積極的に事件化していくことも必要なのではないですか？

左海 確かに、そういう見方もあるかもしれ

ません。でも、私にとって法律相談は一期一会のものではなく、相談に来られた方との関係の起点だと思っていますので、無理に事件化しようとは思っていません。問題があったときに今後も相談していただけるような関係になれば、その中にはどうしても事件化せざるを得ないものも当然出てきますから。一期一会ではなく、将来につながっていく関係性であると考えていますので、無理に事件化はせず、まずは法律相談のみで解決できるように対応しています。

坂本 なるほど、法律相談は依頼者との信頼関係を構築する上での「入口」ということですね。ところで、川崎で開業した理由をお聞きしてもいいですか？

左海 特に場所にこだわりはありませんでした。物理的な距離ではなく心理的な距離が大切だと考えていますので、立地についてこだわりはありません。心理的な距離が近ければ、物理的な距離が離れていてもお越しいただけますから、事務所をどこに構えるかは大きな問題ではなかったのです。たくさんの方々との感謝すべきご縁があって、結果としてたまたま川崎で開業させていただいたということです。現在、川崎、横浜だけでなく大船や藤沢などからもお越しいただいておりますし、遠くは大阪の方もいらっしゃると思います。こういう心理的な距離を大切にするという意味で、法律相談を重視しているのです。

坂本 ホームページを拝見したところ、特別な相談料の設定など「敷居の高さ」を打破する取り組みもされていますね。

左海 はい。65歳以上の方や学生については相談料を特別料金としていますし、法律相談を出張で行ったりもしています。

坂本 「さかい法律事務所」という名称の由来は、氏名ですか？ それとも住所？

左海 氏名です。たまたま住所も境町でした。ひらがなにしたのは、柔らかい感じがするのと、まわりの多数意見でもあったので。こだわっているのは名称でも、場所や立地でもありません

ので、今後変わっていることもあるかもしれませんがね。ただ、開業するなら住宅地の一軒家がいいなと漠然と思っていました。

坂本 事務所は住宅地の一軒家ではありませんが、事務所のまわりの環境を考えると、結果、思い描いていたイメージに近いですね。

左海 そうですね。

坂本 事務所から裁判所（横浜地方裁判所川崎支部）まで何分くらいですか？

左海 歩いて10分くらいですね。

坂本 一般に、法律事務所は裁判所周辺や駅周辺という立地が多いと思うのですが、そのような立地を選ばなかったのはなぜですか？

左海 裁判所の近くというのも、駅周辺というのもステレオタイプかな、と（笑）。

坂本 ところで、個人事務所だとOJTの機会がほとんどないと思うのですが、その点について不安はありませんでしたか？

左海 勤務弁護士の場合と比較すると、確かにそうかもしれませんが、誰もフォローしてくれませんが、最初はこれでもかというほど周到に準備をしてから臨んでいました。そのおかげで、密度の濃い日々を過ごせていたと思います。また、微妙な判断のときなどは、法科大学院でお世話になった実務家教員（弁護士）の方々と諸先輩方にアドバイスをいただいたりもしていました。この場を借りて、お世話になりました皆様方に御礼申し上げたいと思います。ありがとうございました。

坂本 扱っている事件に何か特色はありますか？

左海 相続が多いですが、離婚や一般民事事件ももちろん扱っています。

坂本 開業して3年目を迎えました。事務所の経営状態はいかがですか？

左海 コメントしづらいですね。開業して1～2年で十分な黒字を出そうとは考えていませんでしたし、5年を一つの区切りと考えていますので、2年後にまた聞いていただければ。大事なのは「信頼」ですので、焦って目先の利益

をかき集めて仕事の「質」を落としてしまったら、何の意味もありません。ひとつひとつの仕事丁寧に積み重ねていけば、自ずと結果はついてくると信じています。最近は依頼者の口コミで関係が繋がっていくことも増えてきていますので、丁寧に仕事していくことの大切さを実感しています。

坂本 営業活動的なことは何かされていますか？

左海 ひとつひとつの法律相談や依頼に丁寧に対応していくことこそが営業活動だと思っています。また、今後は相続に関するセミナーなども積極的に実施していきたいと考えています。

坂本 理想を実現するために、がんばってください。応援しています！今日は長時間、ありがとうございました。

左海 こちらこそ、ありがとうございました。

（インタビュー：平成28年8月23日）

左海弁護士は、神大ロー入学前に他のロースクール入試で偶然会っていたり、神大ローでは同期入学で出席番号も前後だったり、身近な存在でした。しかし、インタビューにもあるように、ロー在学中は授業時間外はほとんど会えなかったため、今まで彼の熱い思いに触れる機会はありませんでした。今回のインタビューでは、親族関係に重きを置く彼の価値観の一端を聞くことができました。また、彼の目指すところは、法科大学院制度の理念として言われた「国民の社会生活上の医師」としての法曹とか、「町医者のような弁護士」と要約することができるのではないのでしょうか。彼が理想を実現するまでには、もう少し時間がかかりそうですが、机を並べた友人の活躍をこれからも応援します!!（私も彼を見習わなければ……。）

